

自分の命を守り、未来につなげる子供の育成

～地震・津波を想定した防災教育を通して～

屋久島町立小瀬田小学校

教諭 小嶋 みずえ

1 主題設定の理由

屋久島町は、南海トラフ地震の想定津波高が県内でいちばん高く、最大13mとなっている。本校は、2つの川に挟まれ、標高44mの高台に立地している。大地震の際、小瀬田小校区は津波が川を遡上したり、橋崩落により集落が孤立したりすることが想定されている。本校は、児童の多くが海に隣接する中央中学校(標高4m)に進学する。また、島内だけでなく島外の高校や企業等に進学・就職する児童も多い。

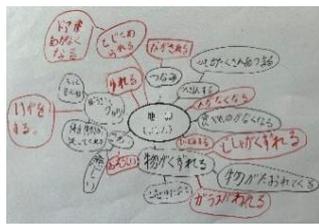
そこで、生涯にわたり、いつどこにいても地震や津波から自分の命を守ることができる児童の育成が肝要と考え、本主題を設定した。

2 研究の実際

(1) 学級活動や総合的な学習の時間の学び

ア イメージマップの活用

実態把握のために全学年が作成したイメージマップ(個人→グループ→学級全体)から、地震に対して大きな不安を抱いている児童が多いことが分かった。そこで、災害を正しく理解し、自分で判断・行動できる力を付けることで、児童の安心につながるのではないかと考え、学習を計画・実践することにした。



【個人のイメージマップ】

イ 学習の系統的な位置付け

学級活動、総合的な学習の時間の防災学習

【1・2年生の目標】	【3・4年生の目標】	【5・6年生の目標】
○地震や津波の災害について知り、自分の命を守る行動をとることができる。	○学校の施設や自宅での災害時の危険について理解し、自分の命を守る行動をとることができる。	○学校や地域の様子や特徴を理解し、様々な場面で発生する災害を予測して、自分の命を守る行動をとることができる。
学級活動 (全5時間) 「地震や津波について知ろう」 ※生活科と関連	総合的な学習の時間 (全10時間) 「自分の命は自分で守れるようになろう」	総合的な学習の時間 (全16時間) 「命を守るために備えよう」

(2) 各教科等との横断的な学び

各教科等と防災教育が関連する内容を明らかにし、指導計画に位置付けた。6年理科「大地のつくり」では、実際に地層を見学し、かつての津波被害の歴史について学んだ。4年社会科「風水害からくらしを守る」では、避難訓練等、これまでの防災学習も絡めて新聞にまとめ、発表した。各教科等と関連を図り、横断的に学ぶことで、日常的に防災意識を高めている。



【6年理科】



【4年社会科】

(3) 実効性の高い避難訓練の計画・実施

ア ハザードマップを活用した卓上訓練

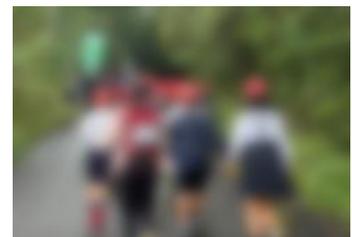
朝活動のショート訓練で、自宅の場所や危険箇所を確認し、近所に住む友達と避難行動について考えた。町のハザードマップを活用することで、自宅の標高や周辺の土地の様子をより具体的に知ることができた。



イ 高台への避難訓練

本校は、標高44mで津波については大きな心配はないと言われている。しかし、中学校へのつなぎを考慮し、さらに生涯にわたって災害から命を守る児童を育成するという視点に鑑み、高台へ逃げるという経験が必要と考え、訓練を実施した。

三次避難場所や経路については、職員で熟考を重ね、シミュレーションをしたり、地域の防災士にアドバイスをもらったりしながら、決定した。



ウ 封筒訓練

けが人や体調不良者など、様々な状況や余震を想定した訓練である。封筒の中に「〇〇さんが過呼吸を起こした」「〇〇さんが大量出血」などの児童の状況を書いたカードが入っており、訓練開始後に担任がカードを確認し、その状況に臨機応変に対応していった。緊張感のある訓練で、実際の対処や職員の動きについて課題が見付かった。



【カード例】
文科省「実践的防災教育の手引き(小学校編)」より



エ 訓練後の振り返り

毎回、避難訓練直後に職員が集まり、児童の様子や課題、改善点について確認している。実施後すぐに行うことで、子供や自分たちの行動について詳細に振り返ることができる。課題は、次の避難訓練へつなげ、PDCAサイクルでより実効性の高い避難訓練になるよう努めている。また、子供たちも振り返りを行い、それぞれの困り感や課題は、学級活動や総合的な学習の時間での防災学習で解決を図っている。



(4) 日常的な防災啓発

校外学習の際は、玄関に掲示しているハザードマップをもとに、行き先の地形や標高について考える時間を設けている。地震発生時にどのような被害が予想されるか、どのような避難行動が必要かについて全体で検討することで、いつどこで起こるか分からない地震・津波に備え、常に防災の視点をもって過ごすことができるように意識付けを



行っている。

(5) 非常持ち出し袋の作成

もしものときに備え、親子で非常持ち出し袋の作成を行った。備えの視点(①命に関わるもの②その子に必要なもの③あると便利なもの)をもとに、防災士の方からアドバイスをもらいながら親子で作成した。非常持ち出し袋は、体育館舞台下に保管し、毎年見直しを行う予定である。



(6) 環境整備

防災バッグの中身を検討し、校舎1階の廊下に4箇所設置した。また、防災コーナーや5・6年生が作成した校区内の防災マップは、子供たちの目に留まるように玄関に掲示している。有事の際に備えて、食料品や携帯トイレ等の備蓄も進めている。【校区内の防災マップ】



3 成果と課題

(1) 成果

- ア 地震時の対応について知識や技能が高まり、訓練では、自分たちで考えて命を守る行動がとれるようになってきた。
- イ 防災に関する意識が高まり、備えの大切さに気付いたり、被災後の生活について具体的なイメージをもったりできるようになってきた。
- ウ 学びを積み重ねることで、子供の不安が「こんな行動をとればよい」という安心に少しずつ変わってきている。

(2) 課題

- ア 連続性や関連性を意識した教科等横断的な学びを更に充実させる必要がある。
- イ 調べたこと、学んだことをアウトプットする場を設定する必要がある。
- ウ 学びを実践につなげるために、更に家庭・地域と連携を図る必要がある。